

「会員短信 55」

「昔の私に会いにゆく」

山岡純子

私が、滑稽俳句に出会ったのは、高知大学で開講された放送大学の面接授業である。二日間の八木会長の俳句講座で最初に作った句が、

まっことによう来たねえとにごり酒

発表すると、会場は大爆笑となった。これは三年前に詠んだものだが、この句を見ると、“あの時、ハイクアートをもって集合写真を撮ったなあ”とか、“猫好きのとても面白い人がいたよなあ”とか、次々と新鮮な映像が浮かび上がってくる。

俳句とは、昔の私に会いに行くことができるツールなのかもしれない。この句を詠んだ時季はいつだったかしらと思った時、にごり酒は秋の季語なので、肌寒い晩秋だったことも思い出される。

受講後、好奇心旺盛な私は、インターネットで調べてすぐに滑稽俳句協会に入会してしまう。しかし、毎月の三句がなかなか作れず、本当に大変だった。本当のことを言うと、今でも大変である。

最近の私の投句メールは、四季の草木のかすかな声を詠んでいるつもりである。編集部からの暖かい丁寧なお返事を頂くと、私の思うこと感じることは、これでいいのだ、人と違っていいのだと思える。

これからも、私の心のアルバムを増やし続け、たまにそっと開けてみようと思っている。そして、その時、私の俳句を聴いてくれ、苦労話も笑い飛ばしてくれる仲間がいると、とても素敵だなあと思う。

春の野をびよんびよん跳ねたい兔年

これからもどうぞよろしく願いいたします。